



信友会会報

2010年6月

<<5月例会より>>

2010年度第2回目の例会では、私たちの信仰の基礎を問い直す試みとして、協力牧師の中野実先生に信仰問答書に基づきお話しいただきました。教会が何を信じ、何を告白するのかについての教育は、すでに初代教会の時代から大切にされていたこと、信仰の基礎を学び続け、確かめることは大事なことであることを改めて知らされました。

信友会 5月例会

「信仰について考える道筋を学ぶ ～信仰問答書に基づきつつ～」 中野 実先生

信仰問答書を読み比べることによりキリスト教信仰の道筋、基礎について学ぶのが今日のはなしの目的です。

そこで三つの信仰問答書を紹介します。

『ハイデルベルク信仰問答』: 宗教改革時代のもので古典的ですが、幅広く各教派で読まれています。

『みんなのカテキズム』: アメリカ合衆国長老教会(Presbyterian Church U.S.A.)によるもので、「わたくしたちは神さまのもの - はじめてのカテキズム」(10歳位から)と「学習用カテキズム」(青年以上)の両方を1冊にまとめたものです。

『雪ノ下カテキズム』: 鎌倉雪ノ下教会の牧師であった加藤常昭先生が書かれたもので、改訂新版が4月に教文館から発刊されました。

「カテキズム = 信仰問答書」ということではない

カテキズムとは、信仰教育の教科書というくらいの意味で、必ずしも信仰問答の形ではありません。カテキズムの語源となっているギリシャ語はカテーケオーで、口頭で教えるという意味です。例えば、ルカによる福音書の献呈の辞(1章4節)を参照ください。

さて信仰教育は、具体的には受洗前だけではなく、継続して行われる必要があります。そのような受洗前後の信仰育成教育がすでに初代教会において行われるようになりました。しかし中世になるとこの信仰育成教育が崩れます。初代教会からの伝統を取り戻したのは宗教改革者(プロテスタントたち)です。例えば、マルティン・ルターが書いた「小教理問答」は、信仰教育の出発点となるものです。十戒の説明から始まって、主の祈り、洗礼、聖餐などが少しずつ問答の形で、紹介されているのが、ルターの小教理問答です。ジャン・カルヴァンも「ジュネーヴ信仰問答」を書き、そういう流れの中で、改革長老派の信仰問答書でありつつ、超教派的なものでもある「ハイデルベルク信仰問答」が生まれました。多くの信仰問答書の中では使徒信条、十戒、主の祈りの三つが解説されています。三要文(さんようもん)という言い方が用いられます。今回紹介する三つの信仰問答書においてもこの三つがその中で説明されています。



20世紀に入って信仰問答教育がうまくいかない現実が浮き彫りになり、権威主義的な詰め込み、特に子どもに対して非常に形式的な教育になっているとの批判が起こってきました。そして、次第に信仰問答教育が熱心になされなくなってしまったのです。しかし、それらが必要であるということも同時にわかってきました。20世紀の終わりになり、新しいカテキズム、子どもたちの成長段階にあった、それぞれに相応しい、もっと柔軟なカテキズムを作ったらどうかということになりました。各教派がいろいろなものを作り始めたのです。今回はその中の一つ、アメリカ合衆国長老教会 (Presbyterian Church U.S.A.) の『みんなのカテキズム』が日本語にも訳されていますので紹介します。

カテキズムがどのような構成になっているか

各信仰問答書の構成をみると、私たちが信仰の道筋、論理をどのように考えていけばよいかかわってきます。『ハイデルベルク信仰問答』の最初の言葉は、大変有名です。「問1 生きている時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは、何ですか」で、「答 わたしが、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものであることとあります。・・・」とあります。



「慰め」ということから始まっており、このことが私たち人間にとって根本的なことだということが前提とされているのです。死ぬ時ですら「慰め」といえることがあるのか、という問いです。これは、大変深い意味合いのもので、この慰めがどこからくるのか、ということとは「自分が何者であるか」ということと結びついています。「自分は何者なのか」という時に、はっきりと「自分は自分のものではない」ということを認めるところから始めています。これはキリスト教の大事なものの考え方です。「慰め」と「慰めを得る根拠」として、「自分が何

者であるか」と問う時に「自分が自分のものではない」ことを認め、「私たちはキリストのものなのだ」ということを教えています。

「問2 それならば、あなたがこの慰めの中に、祝福されて、生きて死ぬことができるためには、あなたは、いくつかのことを、知らねばならないのですか。」つまり、自分は自分自身のものではなく、イエス・キリストのものである、ということ。そこから、私たちは慰めを得られます。そのことに生き、死ぬとするならば、そのために何を知らなければならないのでしょうか。「問2」は、これからこの信仰問答書で何を語るかを要約しています。第一は、「自らの罪と悲惨とがどんなに大きいか」ということで、自らの罪を知ることの意味します。私たちに慰めが与えられるために知るべきことの第一として、自らの罪の問題を知ること。第二に、知らされている罪の現実からどのようにして私たちは救われるのか、ということ。そして、第三に、その神様の恵みによる救いにどのように「感謝すべきか」ということです。

第一部は、人間の罪の現実を語るのですが、創世記のことを取り上げ、人間が神様から離れてしまっている現実を示し、第二部の「人間の救いについて」では、イエス・キリストの恵みを述べ、使徒信条、洗礼と聖餐が語られます。最後の第三部で「どのようにその恵みに対して感謝するのか」ということで新しいわざ、十戒、祈り（主の祈りを含む）について語られます。信仰を考える上の基礎である自己理解の問題＝私たちが何者であるのか、ということから信仰問答書が出発し、人間の罪の問題から始めているのです。そして、救いを語り、その救いに対する感謝へと論理展開していき、その過程で使徒信条、十戒、主の祈りの解説がなされるのです。

次が『みんなのカテキズム』です。このうち、「はじめてのカテキズム」(10歳位から)は、聖書の中のいろいろな信仰的な物語を上手く引用しながら説明がなされています。「問1 あなたは誰ですか」、「答え わたし

は神さまの子どもです。これは、ある意味で古典的な発想です。自己理解、自分が何者なのか、ということから始め、私たちがキリスト者である、ということですから、自らの自己理解が根本的なことなのだということになります。「問2 神さまの子どもであるとはどういうことですか」、「答え わたしが、わたしを愛してくださる神さまのものだということですよ。この「問2」も「ハイデルベルク信仰問答」とある意味で似ています。神の子どもである、というアイデンティティです。そのことは、「神さまは、わたしを愛してくださっている。神さまのものなのだ、だから、わたしは、わたしのものではなく、わたしを愛してくださる神さまのもの」という自己理解です。

「問3 あなたは何によって神さまの子どもになりましたか」、「答え 恵みという『神さまの自由な愛の贈り物』によってです。・・・」これは、宗教改革の大事な強調点である「恵みによってのみ」ということです。このようにプロテスタントが大事にしてきた「恵みのみ」、「恩寵のみ」、「神さまの一方的な恵み」によって私たちは神さまの子どもとされているという基本がまず、最初に踏まえられています。その上で、創造、罪、イスラエルの選び、契約、十戒、メシア、イエス・キリスト、福音、教会、聖霊、洗礼、聖餐、祈り、主の祈り、と続きます。

「学習用カテキズム」(青年以上)は少し異なっております。「問1 あなたの人生のための神の目的は何ですか」、「答え 神は、わたしが主イエス・キリストの恵みによって、神の愛のために、聖霊との交わりのうちに、生きることを欲しておられます。」



ここで興味深いのは、「あなたの人生の目的」ではなく「神の目的」を問うていることです。「問2」でどのようにしてイエス・キリストの恵みによって生きるのか、を問い、その「答え」として私たちは代価を払って買い取られたものですから、わたしはもはやわたし自身のものではないので、自らの目的のために生きるのではなく、神さまの目的のために生きるのだということですよ。そして、これらの序論的問いに続き、使徒信条、十戒、主の祈り、すなわち三要文が解説されていきます。

最後に『雪ノ下カテキズム』ですが、その特徴は「喜び」から始めています。キリスト者にとっての「喜び」とはどういうものが大切なのです。「問1 あなたが、主イエス・キリストの父なる神に願い求め、待ち望む、救いの喜びとは、いかなる喜びですか」、「答 私が、私どもを神の子としてくださる神からの霊を受けて、主イエス・キリストの父なる神を、『私の父なる神、私どもの父なる神』と呼ぶことができるようになる喜びです。・・・」

「神の子とされている」ことが喜びであるというのは、「はじめてのカテキズム」と同じです。「私たちが神さまを父と呼べる」こと、「私たちは神さまの子どもである」ということが何よりも喜びなのです。問3では、「ただひとりの神のみ子イエスがいてくださるからこそ、あなたもまた神の子であり得るのですね」とあり、問5では「神の子とされることがあなたにとってなぜ大きな喜びとなるのですか」の答には「それは、真実に生きるべき本当の自分を発見する喜びです。・・・」とあります。

信仰問答書から見えてくる「信仰について考える道筋」

これらの信仰問答書は、共通して「自分が何者であるか」ということを出発点としています。「神の子とされている」ことが、「喜び」であり、「慰め」であるということも同様です。自分が何者であるかを知ることが大

切であると信仰問答書に語られています。それが「喜び」であり、「慰め」である、ということです。そこからキリスト者は出発するのだという共通した論理があります。私たちは、神さまからの一方的な恵みによって、イエス・キリストを通して、神さまと人格的な交わりに入れられた「神の子ども」である。カテキズムを通してそのような「信仰を考える道筋」が見えてきます。

(文責：折原威男)